

原著論文

心理学を学ぶ学生に関するイメージ調査 (1) 高校生の親を対象としたオンライン調査研究¹

中京大学心理学部 吉本 早苗²
中京大学心理学部 長谷川有香
中京大学心理学部 首藤 祐介³
中京大学心理学部 山本 竜也
中京大学心理学部 川島 大輔
中京大学心理学部 小島 康生

People's images of psychology students: Part I, online survey of parents of high school students

YOSHIMOTO, Sanae (School of Psychology, Chukyo university)
HASEGAWA, Yuka (School of Psychology, Chukyo university)
SHUDO, Yusuke (School of Psychology, Chukyo university)
YAMAMOTO, Tatsuya (School of Psychology, Chukyo university)
KAWASHIMA, Daisuke (School of Psychology, Chukyo university)
KOJIMA, Yasuo (School of Psychology, Chukyo university)

We investigated the relationship between parents' interest in psychology and their recommendations to their children regarding psychology study. Around 700 Japanese parents of high school students participated in an online questionnaire regarding their thoughts on psychology and what beginners can learn from the field. We found parents who had a deep interest in psychology were inclined to recommend that their children study psychology in college. Multiple linear regression analysis showed the potential skills acquired through psychology study may be a factor influencing parents' interest levels in the subject. Our findings suggest the number of students enrolled in a school of psychology increased when such students have extracurricular opportunities to learn about psychology.

Key words: image of psychology, parents of high school students, online survey

はじめに

大学進学において、心理学は最も人気のある専攻の一つであり、1990 年代初頭には約 200 もの学部・学科で心理学を専攻することができるようになった (佐藤, 2002; 詫摩・山本, 1996; Tanaka-Matsumi & Otsui, 2004)。一方で、心理学についてマスメディアが発信する情報は不正確なことも多く、実証

科学としての心理学とは大きな隔たりのあるイメージを抱えたまま心理学部・学科へ入学してしまう者も少なくないという指摘もしばしば見受けられる (工藤・鈴木・小林, 2006; 松井, 2000; 宮本, 1994; 和田, 2004)。つまり、マスメディアが発信する「心理学」と学術的な心理学には乖離があり (楠見, 2013)、心理学には興味があっても大学で専門的に学ぼうとする意欲には結びつかない可能性がある。

平成 17 年 1 月 28 日に行われた中央教育審議会における「我が国の高等教育の将来像 (答申)」(文部科学省, 2005) によると、18 歳人口は 1992 年の 205 万人をピークに減り続けている。一方で、大学・

1 本研究は、2016 年度中京大学心理学部予算で行われた。

2 現在の所属は広島大学、調査開始時の所属は中京大学。

3 現在の所属は広島国際大学、調査開始時の所属は中京大学。

短大への進学者数は増加の一途をたどり、1992年から2016年までの24年間に進学率は約20%増加した(文部科学省, 2016)。そのため、正規の4年制大学が立て続けに閉鎖するという事案は発生しなかった。現在、18歳人口の推移はほぼ横ばいの状況であるが、2018年以降は再び減少に転ずると推計されている(内閣府, 2014)。1992年とは異なり、大学進学率も伸びないと予想されていることから、2018年以降の大学進学者数は18歳人口とともに減少し、大学の経営難が顕在化して社会問題化するとされている(伊藤, 2016)。これは、大学のいわゆる「2018年問題」として知られている。未曾有の少子化を迎える我が国において、学問としての心理学のイメージを世間一般に浸透させることは、子どもの心理学部・学科への進学に対する関心を高める上で重要である。そこで本研究では、大学へ進学する可能性のある高校生の親を対象に心理学を学ぶ学生のイメージに関する調査を行い、親の心理学に対するイメージと子どもが心理学部・学科へ進学することに対する意識との関連性を検討した。

マイナビによる「就職活動に対する保護者の意識調査」(マイナビ, 2015)によると、子どもの就職活動に干渉する親も増えており、親に反対されて内定を辞退する学生も一定数存在する。このように、昨今は親が成人した子に対してすら過干渉である傾向にある。成人後の就職活動において親の意見が子どもの進路選択に反映されるのであれば、成人前の大学進学においても子どもの学部・学科選択に親の意見が影響すると考えられる。したがって、親が子どもの進学先として心理学部・学科を推奨するか否かは、子どもが心理学部・学科への進学を希望するか否かに繋がる可能性がある。

本研究では、これまでに心理学を専門的に学んだことのない親を対象に、子どもの進学先として心理学部・学科を推奨することと関連する要素を探索的に調べることを目的とした。そのため、親の心理学に対する関心の程度と子どもへの心理学部・学科への進学推奨の程度の関連性を検討した。また、心理学を学ぶとできるようになると思われることが心理学に対する関心度に影響するか検討した。

方法

調査参加者

調査はインターネット調査会社(クロス・マーケ

ティング)に委託し、2016年12月に実施された。全国に居住する同社のモニタのうち、高等学校に通う1,2年生の子どもを持つ親700名を調査対象とした。このうち、「大学・大学院で心理学を専門的に学んだ」と回答した31名を除外した669名(男性334名、女性335名、平均年齢47.5歳、35~64歳)のデータを分析の対象とした。「学校で心理学に関する授業を受けたことがある」と回答した者は140名(20.9%)であった。

調査項目

心理学を学ぶ学生に関するイメージを調べるため、岩崎・大橋・皆川(2012)及び大橋・岩崎・皆川(2012)により作成された「心理学を学ぶとできること」に関する質問項目を使用した。「カウンセリングができるようになる」、「いやな相手とも上手につき合えるようになる」、「他の人たちの持つ精神的問題を理解しやすくなる」、「相手の性格がわかる」など、一般的に心理学を学ぶとできるようになると思われるイメージ18項目について、5件法(1:そう思わない, 2:ややそう思わない, 3:どちらとも言えない, 4:ややそう思う, 5:そう思う)で評定を求めた。また、「心理学に興味がある」、「心理学部(学科)を自分の息子に進学先として勧めたい(男のお子さんがいない場合には想像でお答えください)」、「心理学部(学科)を自分の娘に進学先として勧めたい(女のお子さんがいない場合には想像でお答えください)」という3項目についても同様に5件法で評定を求めた。以上の調査項目に加え、年齢、性別、心理学の学習歴についての回答を求めた。

結果

まず、心理学を学ぶとできるようになると思われることに関する18項目全てを対象として因子分析を行った。因子分析により抽出された因子に基づいて尺度得点を算出し、親の心理学に対する興味程度、子どもへの心理学部・学科への推奨の程度との相関分析を行った。また、各因子が心理学に対する興味に及ぼす影響を調べるため、重回帰分析を行った。詳細を以下に述べる。

因子分析

心理学を学ぶとできるようになると思うことにつ

いて、岩崎他 (2012) では大学生を、また大橋他 (2012) では 10 代を含む複数世代から構成される一般市民を対象に因子構造が検討されており、高校生の子どもの持つ親 (30～60 代) という本調査の対象者とは異なる。そこで本研究では、当該調査項目について改めて探索的因子分析を行った。予備的に行った分析から、「自分がどのような人間か理解することができる」及び「プロファイリング (犯罪捜査) を行うことができる」は因子負荷量が .40 未満であったため、これら 2 項目を除外した 16 項目について最尤法プロマックス回転を用いて因子分析を行った。固有値の変化は、第 1 因子から順に 3.43, 3.02, 2.83, 2.25, .83 であり、スクリー法及びカイザー・ガットマン基準に基づいて 4 因子とした (Table 1)。

第 1 因子は「カウンセリングができるようになる」、「人の心を理解し、アドバイスをすることができる」、「人の悩みを解決することができる」、「人の心のケアができる」という 4 項目が負荷し、カウンセリングと命名した。第 2 因子は「人をうまく説得できる」、「いやな相手とも上手く付き合えるようになる」、「人にだまされにくくなる」、「コミュニケーション技術が上がる」という 4 項目が負荷し、人づきあいと命名した。第 3 因子は「教育現場で役に立つ」、「他の人たちの持つ精神的問題を理解しやすくなる」、「心理学は科学の一つであり、実験データなどを取

り地道な作業ができる」、「人間を深く知ることができる」という 4 項目が負荷し、専門的な人間理解と命名した。第 4 因子は「人の考えていることが読めるようになる」、「相手の性格がわかる」、「次に相手がどう行動するかがわかるようになる」、「心の問題を見抜くことができるようになる」という 4 項目が負荷し、心理的洞察と命名した。信頼性の指標として、4 因子の信頼性係数 (係数) を算出したところ、カウンセリング (= .92), 人づきあい (= .88), 人間理解 (= .87), 心理的洞察 (= .90) であった。項目平均により尺度得点を算出した。

相関分析

尺度得点と相関係数の値を Table 2, 3 にそれぞれ示す。Table 3 に示した相関係数の値から、親の心理学に対する興味と子どもに心理学部 (学科) への進学を勧めたいと思う気持ちに有意な正の相関がみられた ($r_s = .41-.45$, $p_s < .001$)。息子に進学を推奨することと娘に進学を推奨することにも有意な正の相関がみられた ($r = .82$, $p < .001$)。また、心理学に対する興味と心理学を学ぶとできるようになると思うことに関する各尺度得点とも有意な正の相関がみられた ($r_s = .29-.39$, $p_s < .001$)。

重回帰分析

心理学を学ぶとできるようになると思うことのう

Table 1 心理学を学ぶとできるようになると思うことに関する質問項目に対する因子分析の最終結果 (最尤法プロマックス回転)

	第 1 因子 カウンセリング	第 2 因子 人づきあい	第 3 因子 専門的な人間理解	第 4 因子 心理的洞察	共通性
カウンセリングができるようになる	.82	.07	-.10	.11	.79
人の心を理解し、アドバイスをすることができる	.77	.08	.10	-.07	.83
人の悩みを解決することができる	.74	-.17	-.01	.20	.70
人の心のケアができる	.47	.22	.38	-.18	.70
人をうまく説得できる	-.10	.94	.06	-.04	.78
いやな相手とも上手く付き合えるようになる	-.03	.83	.13	-.01	.73
人にだまされにくくなる	.26	.67	-.20	.15	.59
コミュニケーション技術が上がる	.09	.55	.13	.14	.69
教育現場で役に立つ	.20	-.09	.81	-.04	.74
心理学は科学の一つであり、実験データなどを取り地道な作業ができる	-.07	.02	.72	.03	.51
他の人たちの持つ精神的問題を理解しやすくなる	-.08	.18	.65	.12	.71
人間を深く知ることができる	-.10	.08	.49	.37	.63
人の考えていることが読めるようになる	.04	.04	-.08	.85	.71
次に相手がどう行動するかがわかるようになる	.13	-.09	.13	.72	.71
相手の性格がわかる	.06	.09	.08	.70	.76
心の問題を見抜くことができるようになる	.07	.16	.21	.45	.67
寄与率	.60	.04	.04	.03	
累積寄与率	.60	.64	.67	.70	

注：因子負荷量が .40 を超えた箇所を太字で示した。

Table 2 尺度得点の記述統計量

変数名	平均値	標準偏差	歪度	尖度
心理学への興味	3.15	.97	-.22	.11
息子に進学推奨	2.78	.83	-.46	.75
娘に進学推奨	2.85	.83	-.55	.91
カウンセリング	3.35	.77	-.43	.71
人づきあい	3.19	.71	-.36	1.23
専門的な人間理解	3.41	.71	-.54	.98
心理学的洞察	3.29	.77	-.41	.68

Table 3 各尺度得点の相関行列

	1	2	3	4	5	6	7
1. 心理学への興味	-						
2. 息子に進学推奨	.41 ***	-					
3. 娘に進学推奨	.45 ***	.82 ***	-				
4. カウンセリング	.29 ***	.16 ***	.20 ***	-			
5. 人づきあい	.34 ***	.25 ***	.29 ***	.74 ***	-		
6. 専門的な人間理解	.39 ***	.20 ***	.23 ***	.77 ***	.70 ***	-	
7. 心理学的洞察	.34 ***	.21 ***	.25 ***	.76 ***	.74 ***	.76 ***	-

*** $p < .001$

Table 4 心理学への興味を目的変数とした重回帰分析

説明変数	
専門的な人間理解	.35 ***
人づきあい	.17 **
R^2	.17 ***
調整済み R^2	.17 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$

ち、どの尺度得点が心理学への興味に影響を及ぼすか検討するため、心理学への興味を目的変数、心理学を学ぶとできるようになると思うことの各因子を説明変数とし、ステップワイズ法を用いて重回帰分析を行った。結果を Table 4 に示す。決定係数は $R^2 = .17$ ($F(3, 665) = 34.63, p < .001$) であり、人づきあい ($\beta = .17, p < .01$) 及び専門的な人間理解 ($\beta = .35, p < .001$) の標準化偏回帰係数が有意であった。

考察

本研究では、親が子どもの進学先として心理学部・学科を勧めることと関連する要素を検討した。その結果、親自身の心理学に対する関心度が高いと、子どもにも心理学部・学科に進学させたいと思う程度が高いことがわかった。子どもの進路選択には、親の意向が大きく関与するという先行研究の指摘(田澤・梅崎, 2016)を踏まえると、実際に進学する子どもだけでなく、その親/保護者にも心理学に興味

を持ってもらえるような場を提供することが子どもの心理学部・学科への進学希望を高めることに繋がる可能性があることを示唆する。オープンキャンパスや高校への出前授業など、大学の進学に関する広報活動は高校生のみを対象とすることがほとんどであるが、大学の立場から考えるなら、保護者向けの広報活動を取り入れることが子どもの進学希望を高めることに寄与するかもしれない。

では、保護者の心理学に対する関心度を高めるには、どのような取組が有効だろうか? 一般的に、心理学を学ぶとカウンセリングをすることができるようになるというイメージがある(前堂, 2005)。本研究においても、心理学を学んでできるようになると思うこととしてカウンセリングという因子が抽出された。しかしながら、親の心理学への興味に寄与する要素として、カウンセリングができるようになることよりも人づきあいがうまくなることや専門的な人間理解ができるようになることのほうが効果的であることが示唆された。広く子どもをもつ親に心理学への興味を深めてもらうためには、カウNSE

リングばかりに特化せず、心理学には幅広い分野があること、またそれらの包括的知識が専門的観点に基づく人間理解に大きく貢献することを周知していることが重要と考えられる。

以上のような示唆が得られた一方で、本研究では以下に述べる方法的問題や研究課題を残している。問題点としては、データの信頼性が挙げられる。オンライン調査は、通常は調査が困難な対象者のデータを得ることができるという利点がある一方で、対象者が真面目に回答しないこともあり、得られたデータの信頼性が低い可能性がある (Aust, Diedenhofen, Ullrich, & Musch, 2013)。研究課題としては、心理学部・学科卒業生の就職率などの影響がある。田澤・梅崎 (2016) が指摘するように、子どもの就職活動に積極的に関わろうとする保護者にとっては、保護者自身の心理学に対する関心度よりも心理学部・学科を卒業した後の就職先や社会人として役立つスキルが身につくか否かに重点を置く可能性がある。なお、心理学部・学科卒業生が身につけられる社会人基礎力のイメージについては長谷川他 (2017) を参照されたい。今後は上述のような課題を検証し、子どもの心理学部・学科への進学に影響する要因を明らかにすることによって心理学部・学科への進学希望を高めることに貢献すると期待される。

引用文献

- Aust, F., Diedenhofen, B., Ullrich, S., & Musch, J. (2013). Seriousness checks are useful to improve data validity in online research. *Behavior Research Methods*, 45, 527-535.
- 伊藤博敏 (2016). 目前に迫る 2018 年問題 ついに文科省が「私大の闇」に斬り込む!? 現代ビジネス <http://gendai.ismedia.jp/articles/-/48748> (2017 年 7 月 1 日)
- 岩崎智史・大橋恵・皆川順 (2012). 心理学に対するイメージ (1) 心理専攻学部生と非心理専攻学部生を対象とした横断的研究 東京未来大学紀要, 5, 1-9.
- 工藤与志文・鈴木健太郎・小林好和 (2006). 大学生の心理学に関する「素朴概念」 札幌学院大学人文学紀要, 76, 1-16.
- 楠見孝 (2013). 心理学とサイエンスコミュニケーション 日本サイエンスコミュニケーション協会誌, 2, 66-71.
- 前堂志乃 (2005). 大学生のカウンセリングに対するイメージの変化と心理学を学ぶ実感についての研究 自主的体験学習プログラムとの関連を中心に 沖縄国際大学人間福祉研究, 3, 1-35.
- マイナビ (2015). 2015 年度就職活動に対する保護者の

- 意識調査 マイナビ <https://saponet.mynavi.jp/release/other/#category-parents> (2017 年 8 月 5 日)
- 松井三枝 (2000). はじめて学ぶ「心理学」に対するイメージの変化 「心の科学」受講前後の調査から 富山医科薬科大学一般教育, 23, 63-68.
- 宮本邦雄 (1994). 女子大学一年次学生の「心理学」講義評価と「心理学」イメージ 東海女子大学紀要, 14, 121-129.
- 文部科学省 (2005). 我が国の高等教育の将来像 (答申) 文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingichukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm (2017 年 8 月 5 日)
- 文部科学省 (2016). 学校基本調査 平成 28 年度結果の概要 文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1375036.htm (2017 年 8 月 5 日)
- 内閣府 (2014). 総合科学技術・イノベーション会議 第 1 回基本計画専門調査会 内閣府 <http://www.8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kihon5/1kai/1kai.html> (2017 年 8 月 5 日)
- 大橋恵・岩崎智史・皆川順 (2012). 心理学に対するイメージ (2) 一般市民対象のオンライン調査より 東京未来大学紀要, 5, 11-20.
- 佐藤達哉 (2004). 日本における心理学の受容と展開 北大路書房.
- 詫摩武俊・山本恵一 (1996). 心理学系の博士学位授与状況の調査 1986 年度より 1995 年度まで 心理学評論, 39, 81-136.
- Tanaka-Matsumi, J., & Otsui, K. (2004). Psychology in Japan. In M. J. Stevens & D. Wedding (Eds.), *Handbook of international psychology* (pp. 193-210). New York: Brunner-Routledge.
- 田澤実・梅崎修 (2016). 保護者のかかわりと大学生のキャリア意識 保護者の就職活動への関心度と、学生の満足度に注目して キャリア教育研究, 35, 21-27.
- 和田正人 (2004). 高等教育におけるマス・メディア接触の影響 心理学・社会心理学・教育工学・情報教育へのイメージおよび興味・知識 東京学芸大学紀要 1 部門, 55, 345-352.